



ノア通信

No.24 2018年8月20日発行

当事者の声を発信しよう！

今年から始めた「井戸端会議」は毎回5名前後の方が参加されています。その中に90歳を超えるお年寄りがおられるのですが、いつも戦争時の国による天皇崇拝の洗脳や凄惨な日々の体験を語り、戦争は絶対してはならない、それを語り継ぐことが、当事者の責務だとおっしゃいます。私は戦後生まれの団塊の世代ですので、戦争を体験したことはありません。戦争の悲惨さや苦しさは理屈の上では、十分理解できるのですが、体験した者としなかった者とは、その重みが違います。ですから、私たちも自分自身の体験を伝える責務があると思うのです。私を例にとると、虫と遊んだ体験から生きる力を得ました。里親を体験したことから、里親制度についての様々な問題を悟ることができました。それを伝えなければとの思いから、里山体験プログラムや里親サロンを行うようになりました。体験者でなければ分からないこと、体験者だからこそ説得力を持つことがたくさんあります。NPO法人ノアの活動の一環として、今後はこれまで以上に当事者の声を発信する必要があると考えます。

そんなこともあって、今号では松木さんと南部さんに寄稿をお願いしました。それらへのご意見や感想などをお寄せ下されれば幸いです。みんなが言いたいことを言い合う、言うべきことをしかるべき所に伝える、互いに支え合う地域づくりを実現するためには、当事者が生の声を発信することが肝要ではないでしょうか？

赤とんぼ調査と福祉活動の関係

今年もアキアカネの復活と、ウスバキトンボの移動の謎の解明に向けた調査を行っています。今年が最後の調査になりますが、会員の皆様は「互いに支え合う地域づくり」を目的とした当会の活動と、赤とんぼ調査とどんな関係があるのだろうか？と疑問に思われることと存じます。以下簡単にその関係について、私の考えを述べさせていただきます。

赤とんぼ調査は当会が吸収合併した「むさしの里山研究会」が2003年から始めたものです。調査の目的は日本を代表する2種の赤とんぼ、すなわちアキアカネとウスバキトンボについての情報を収集し、その生息環境の保全に寄与することでした。しかし、なかなか情報が集まらず、保全に向けた先行きが見

通せない状態でノアへの吸収合併となりました。合併を理由に放り出すことがためらわれましたので、ノアで調査を引き継ぎ、今年度いっぱい方向性を見出すことにした次第です。これが直接的な理由ですが、ほかにも大きな理由があります。そもそも里山保全団体である「むさしの里山研究会」と福祉活動を目的とした「ノア」を合併した目的は、福祉活動と里山保全をリンクした活動を目指すことにありました。私は福祉も自然保護も「人間の暮らし」という視点に立てば、同じように大切なことだと思うのです。動植物は食料として私たちの暮らしに欠かせないばかりではなく、草花や鳥や虫たちは私たちの心を慰め、癒してくれる存在です。また、生き物をとおして絵画や文学などの芸術や文化も育まれます。人間は生き物からたくさんの恵みを受け取っている存在だと思うのです。ですから、人間は人と人とのつながりが不可欠なように、生き物との関係も大切だと考えます。福祉と環境を別々のこととするのではなく、人間を支えるものとして、一体的に捉える必要があると思うのです。

アキアカネとウスバキトンボは、田んぼという人間が作り出した環境にちゃっかり住み着き、繁栄した生き物の代表です。同様に田んぼを棲み家として繁殖してきたトキやコウノトリは既に絶滅してしまいました。トキやコウノトリが絶滅しても、私たちの暮らしが困るわけではありません。でも、大空を優雅に飛ぶトキやコウノトリの姿を見ると感動します。私たちは生き物によってお金では買えない力や感動、慰めを受け取っているのですから、そうした生き物を大切にすると同時に、生き物のめぐみを分かち合うため、赤とんぼ調査を引き継いだのです。赤とんぼ調査は今年で終わりますが、これからも生き物の保全と福祉を関連付けた活動を展開するつもりです。

赤とんぼ調査の状況

今年こそ全ての都府県でウスバキトンボの初見日を収集したいと願っていたのですが、8月15日現在22都道府県の情報しか集まりませんでした。今年で3年目ですが、これまで石川県、栃木県などいくつかの県では、全く情報が集まりませんでした。初見日記録の空白県が多いとはいえ、初見日の差異により南から北へ広がる様子が垣間見えます。目下知人にメールで各地の発生状況をお尋ねしていますので、それらを含め今年の報告書ではウスバキトンボの移動、分散についての仮説を提示したいと考えています。また、今年は関東を中心にウスバキトンボが異常に少ないように思います。本種の主な繁殖場所は水田や屋外の水泳プール、公園のコンクリート池など人工的な水辺を主体としています。水田では農薬が使われ、本誌に松木さんが述べているように学校のプールの減少など、ウスバキトンボの繁殖場所が急減する恐れがあります。

一方、アキアカネは昨年大量に羽化した長野県伊那市の水田を案内して頂いたのですが、今年は極めてわずかししか羽化しなかったとのことでした。山ではそれなりにアキアカネが見られるようですが、減少傾向は加速するような気がします。秋になると山からアキアカネが降りてきて、市街地でも見られることでしょう。9月の上旬～中旬には電線や、高い木の枝先など高所で羽を休めている姿を見かけると思います。皆様がお住まいの地でアキアカネが見られたかどうか、毎年チェックしていただくことで、アキアカネの減少を実感されるのではないのでしょうか？

山でのアキアカネ情報

前回発行のノア通信23号に「この夏に標高が1500m以上の高山や高原へ出かけたら、アキアカネがいるかどうか教えて頂きたいのです。」と述べました。それに対し数名の方から情報をいただきましたので、以下に転載します。

T.Yさん：7月16日の月曜日、尾瀬に行ってきました。
鳩待峠～中原山～アヤマ平～尾瀬ヶ原～鳩待峠コースです。
登山開始直後からアキアカネ（とりあえず黄色～オレンジ色のトンボ程度の見分けですが）をちらほら見かけましたが、一番標高の高い中原山付近にはたくさんいましたよ！

U.Kさん：7月27日に至仏山へ日帰り登山に行ってきました。天気は昼頃まで快晴。山頂(2,228m)にはアキアカネが群飛していました。物凄い数で、山頂にいた登山者たちは気味悪がっていたほどです。私も、あれほどの群飛は初めて見ました。

K.Kさん：7月23日に山梨県の清里高原でアキアカネと思われるトンボが植込みのサツキに15頭くらい止まっているのを見ました。

Y.Aさん：8月9日にゴンドラを使って長野県の乳笠山に行ってきました。ゴンドラの山麓駅（標高1050m）周辺では2頭のアキアカネしかいなかったのですが、山頂駅（標高1780m）周辺や入笠湿原にはたくさんのアキアカネが見られました。その中にはしっぽが赤みを増したもの、オレンジのものなど成熟程度が異なる個体が混在していました。



T.Mさん：8月5日から裏磐梯五色沼近辺に行きました。標高は800m位で高地といえるか微妙ですが、アキアカネが多数観察できましたので参考までにご報告します。五色沼近辺で観察されたアカネはほとんど（9割以上）がアキアカネ、マユタテアカネが少数、ヒメアカネとミヤマアカネが各1個体。生息密度に関しては表現が難しいのですが、止まっているような枝先を見ると、ほぼいるという感じです。昨年同時期（08.02-05）に志賀高原の標高2000m位の場所では1歩歩くごとに足元から飛び立つというくらいの密集状態でしたが、裏磐梯はそれほどではないにせよアキアカネが多く観察できました。

学校のプールが消える日

～都市部のトンボの楽園の消滅危機～

松木和雄

近い将来、小中学校からプールが消滅して、現在日本各地で行われている「ヤゴ救出作戦」（6ページの写真）もできなくなる日がくるかもしれない。そんな最近の趨勢を筆者が在住している千葉県の例を中心に簡単に紹介する。

小中学校のプール設置率は、2010年の総務省の統計資料によると全国の小学校で86.7%（千葉県96.5%）、中学校で73.0%（千葉県91.1%）である。実数にすると全国の小中学校で25,000以上のプールがあることになるが、その数は今後10年間で特に都市部で激減する方向に進むものと予想される。既に神奈川県海老名市のように小中学校のプールを全廃した市もある。千葉県佐倉市でも34ある市立小中学校のうち、佐倉小学校、西志津小学校では民間のスイミングスクールで体育の授業を行っている。学校にあったプールが老朽化したため、改修や再建ではなく、スイミングスクールを利用する方法を採用したのである。この2校のプールは撤去され、その跡地はゴムグラウンドとなって子供たちの遊びや運動に使われている。この方向は全国でも広まっていくものと予想される。

その理由として以下の3点が挙げられる。

1) 施設の維持管理費用や労力負担が軽減される

道路や橋など自治体が高度成長期に整備してきた様々なインフラが老朽化しているが、学校のプールも同様であり、老朽化が急速に進んでいる。しかし、プールの改修費は1カ所につき1億円以上、再建の場合は2億円以上かかるという試算もある。水道法で定められた受水槽の清掃や簡易水道の検査などの維持管理費も恒常的にかかる。管理担当の教員の負担も大きい。市営・民間プールを利用したほうがコストや教員の労力削減の点でメリットが大きい。

2) 天候に左右されず、計画通りに授業が実施できる

学校のプールは多くが屋外型のため、授業が実施できるかは雨天などの天候に左右され易い。今年のように猛暑が続いたりする場合は、晴れても熱中症の危険が伴うために授業が中止に追い込まれることもある。それに対して、屋内型のスイミングスクールでは、予定どおりの日程で授業することが可能である。

3) 補助指導員、安全監視員が配置されており、指導の質の向上や安全面での期待ができる

クラス担任教諭とスイミングスクールの専任インストラクターが協同で子供たちの水泳指導にあたることができる。監視体制も整っており、安全面からも児童の保護者に受け入れられ易い。

上述の佐倉市がこの施策を考えさせたきっかけは、2011年3月の東日本大震災だった。従来以上の節電が必要となり、市は様々な施設の電力使用状況を調べ、節電策を積極的に取り入れた。その取り組みの中で学校プールの消費電力量が多いことが判明した。小学校では6月・7月、中学校では6月・7月・8月の電力消費量が、生徒がいない夏休み期間を含むにも関わらず、他の期間と比べて多かったのである。原因はプールの循環濾過ポンプを24時間連続稼働していたためだという。この発見が、学校がプール

を保有することが本当に必要かどうかを考え直すきっかけになった。

同市の資産管理経営室では、自前のプールを持つ残りの32校も築年数平均が約36年と老朽化が進んでいるため、学校でのプール授業の見直しを検討しており、まず市内にある2カ所の市営屋外プールを屋内型に改修、各校の水泳授業に活用する構想を立てているという。

高度成長期にはプール施設を全ての学校に揃えるべきという考え方が主流であった。しかし、時代の流れとともに、上の1)で挙げた維持管理費用の問題が次第に重くのしかかるようになり、行き詰まりを迎えている。少子化が進み、利用者が減る一方の学校プールを存続させた場合、児童一人当たりの維持コストは今後ますます高くなる。加えて、温暖化や異常気象による夏の高温日の増加により、朝礼や運動会も含め夏季の屋外活動の危険性が増大している。スイミングスクールや屋内型の市営プールへの切り替えは都市部では必然の流れであろう。

また、限られた予算は、優先順位として先ず大切な児童の命を守ることに直接関わるものに充当すべきであることは論をまたない。校舎の耐震化工事や教室へのエアコン設置などである。千葉県は耐震化率もエアコン設置率も全国平均以下で、特にエアコン設置率は千葉市、習志野市では何と0%で問題視されている。さらに、今年6月の大阪北部地震ではブロック塀倒壊による痛ましい犠牲者も出てしまった。緊急点検の結果、千葉県内で現行基準に不適合な塀が小学校275校、中学校86校もあり、劣化・損傷が進んだところも多いという。

このような状況下では、優先順位の低いプールの改修はしないで廃止し、授業には外部のプールを利用するという方向は無理からぬことなのかもしれない。しかし、これまで学校のプールを利用してきた都市部のトンボ類にとっては、プールの廃止は良質な止水生息地の減少を意味し、大きなダメージとなる可能性がある。

学校プールは使用しない期間も湛水する。途中に耐力壁の様な仕切のない長方形の槽は、空にして長期間放置すると槽内の空間の方向に力が強くかかり、壁や床に亀裂が生じたりすることがあるためである。また、夏に使用する前には水抜きして清掃を行うため、毎年「かいぼり」をしている溜池のようなもので、年単位でゼロクリアされる止水環境となる。さらに、学校敷地内で施錠管理されているため、天敵となるアメリカザリガニやミシシippアカミミガメ、ブルーギルなどの外来種の放流もほとんどない。また、周囲の木々から落ちた枯葉が堆積した水底はトンボ幼虫の餌となる生物の宝庫である。これは、秋口以降にプールに産卵するトンボ種にとっては天国のような環境であろう。秋に成熟する様々なトンボ種がやって来て産卵するが、ウスバキトンボのような幼虫期間の短いものでは年内でも羽化し、ギンヤンマやアカネ類、シオカラトンボやショウジョウトンボなどは卵または幼虫越冬して翌年5~6月に羽化する。プールでのトンボ幼虫の残存率は非常に高く、調査時期にもよるが、5、6月の「ヤゴ救出作戦」で4桁の幼虫が確認されたこともある(互井, 2004)。

学校のプールからは、実に様々な止水種のトンボが発生することがわかっている。互井(2003)が千葉県市川市全域の小学校プールの調査を行った際にプールから得られた種は、アジアイトトンボ、アオモイトトンボ、ギンヤンマ、ノシメトンボ、アキアカネ、コノシメトンボ、ネキトンボ、ショウジョウトンボ、ウスバキトンボ、シオカラトンボの10種。その後、オオアイトトンボも記録され(互井, 2005a)、11種となった。特に市川市ではコノシメトンボの重要な発生地の一つになっているという(互井, 2004, 2005b)。他県の例では、ホソミイトトンボ、ダビドサナエ(ノ)、ナツアカネ、タイリクアカネ、ベニトンボ、ハネビロトンボ、オオシオカラトンボなども記録され(松良, 1999;九州トンボ談話

会, 2007; 中峯, 2008)、廃校のプールからは台湾ウチワヤンマ、クロスジギンヤンマの幼虫も得られている(九州トンボ談話会, 2007)。また、類似した環境の市民プールからはムスジイトンボ(互井, 2002)、スナアカネ(九州トンボ談話会, 2007)も得られており、今後、学校のプールからも追加記録されるかもしれない。

都市部では、止水種のトンボの発生場所は公園、神社仏閣境内の池と学校プールな



どしか残っていないが、これらの中で天敵となるアメリカザリガニやミシシッピアカミミガメ、ブルーギルなどの外来種の猛攻に晒されていないのは学校プールだけである。その貴重なプールが失われていき、トンボ類にとってはさらに厳しい時代が来ることになりそうなのは、ささやかながらトンボ類の保全に関わってきたもの一人としては残念至極である。

前述の諸課題を考えると、学校のプールを全てこれまで通り存続させるべきであるとは強く主張出来ないが、全部存続、全部廃止という二択ではなく、一部を教育目的で残すという方法を検討できないものかと思う。既に全廃した海老名市では、杉本小学校のプールのみは地域住民の要望を受けて自治会が委託運営する「柏ふれあいつり堀」として再利用されている。それも一つの利用法には違いないが、何校かに一つでよいから、身近な環境教育の場としてプールを残すほうが、より学校本来の目的に即した施設となるのではないだろうか。一部の学校のプールを湛水して残しておくだけで良いのである。それだけで、トンボ類だけでなく様々な水生昆虫やカエルなどと年間を通して児童が直に安全に触れ合うことができ、実験的観察も容易に行うことのできる「ビオトープ」となる。その際どの学校のプールを残すのが良いかについての選択にあたっては、互井(2003)の考察が参考になる。落ち葉の入り易い周辺環境として林地や森に隣接しているプールを選択することが観察種、個体数を増やす上では望ましいと思われる。

参考文献

九州トンボ談話会(2007) 沖縄・九州の学校プール冬のトンボ類調査～ウスバキトンボ幼虫の越冬調査を中心として～. 佐賀の昆虫, (43):213-229.

互井賢二(2002) 八千代市のトンボ類. 八千代市水辺の自然環境調査報告書: 151-173.

互井賢二(2003) 市川市のトンボ目. 市川市自然環境実態調査報告書 2002. 633-688. 市川市自然環境調査会.

互井賢二(2004) コノシメトンボの市川市のプールの記録. 房総の昆虫, (33):16.

互井賢二(2005a) 市川市のプールからオオアオイトトンボを確認. 房総の昆虫, (34):43.

互井賢二(2005b) 2005年コノシメトンボの市川市プールの記録. 房総の昆虫, (35):8-11.

中峯浩司(2008) プールで冬を越す昆虫たち. 鹿児島県の自然だより, 19. 鹿児島県立博物館.

松良俊明(1999) 小学校プールになぜヤゴ(タイリクアカネ幼虫)が棲むのか. 昆虫と自然, 34(10):13-17.

文部科学省・国土交通省(2007) プールの安全標準指針. 26pp.

終の棲家

南部敏明

「ついのすみか」を電子辞書で引いたら、「終の住処」と「終の栖」しか出ていなかった。
例題として、

これがまあ終の住処か雪五尺（一茶）

が載っていた。もうすぐ83歳になり、どう暮らしてゆけば良いか考えなければならない時期になった。今のところ寝込むこともなく車の運転も、町内や医者通いはやっている。しかし、夜は運転しないことにしているし、遠出はできない。私より年上だが、同じ会で活動していた人が、奥さんがなくなり、子どもが遠くに住んでいるので1人では生活できず、施設に入ってしまった。昔はこういうのも老人ホームといったのかもしれない。何回か訪ねて行ったことがある。こういうのが町内にも各地にできているようである。

はっきり言って、こういうところには住みたくないと思った。集合住宅で住んでいるところはひと部屋、ベッドが大きな面積を占領している。洗面台はついていて飲むお湯は部屋の外にポットを沸かすところがあり、そこに汲みに行く。食事は作ってくれるが、食堂に食べに行く。また談話室位もある。部屋には衣類、私物を入れる戸棚もある。

何が違うのだろう。住んでみれば“住めば都”となるのだろうか。今やっていることと言えば、文章を書くことぐらいである。研究論文でなくてもものを書く時には参照したい本がよく出て来る。それが手近にそろっていることが必要である。今いる部屋にある本だけでも、運び込んでもひと部屋ではとても納まらないだろう。書庫、寝室、他の部屋など本の他にも印刷されたものが沢山ある。どこになにがあるか、頭の中に何となくおさまっている。しょっちゅう探し物をしてはいるが。

最初の「これは病院の個室だ！」という印象がいけなかったのだろうか。今は居間と寝室は別である。折りたたみのベッドもあるが、普段使うことはない。何も無くて歌でも詠んでいけばいいのかもしれないが、そんな生活に耐えられるだろうか。とても一茶の心境にはなれそうにない。もっとも、一茶だって最後まで身内と財産争いをやっていたようであるが。

この暑さの中、家の手入れをした。植木屋さんに大きい木を伐ったり、つめてもらった。大工さんに軒天井を張り替えてもらった。屋根、外壁を塗って貰った。これが生活ということなのだろうか。

(2018. 7. 17)

9月～10月の行事日程

今後10月までの行事予定は次ページの表のとおりです。観察会以外はすべて「いこいの家ノア」で午前10時30分～12時に行います。参加予定の方はカレンダーにでも書き込んでおいてください。計画した私でさえ、カレンダーに書いておかないと、忘れたり日にちを間違えてしまうことが度々です。記憶力の低下は目を覆うばかりです。秋の生き物観察会、ノアサロン、里親サロンの詳細は別記しました。

行事タイトル	主催者	開催日	参加対象者
第3回ノアサロン	〃	9月4日(火)	里親制度関心者
第3回里親サロン(自立相談会)	〃	9月20日(木)	里親
第5回井戸端会議	〃	8月28日(火)	誰でも
第6回井戸端会議	〃	9月25日(火)	誰でも
第7回井戸端会議	〃	10月23日(火)	誰でも
秋の虫の観察会	〃	9月22日(土)	ノアの会員とその知人
第5回クリスチャンの集い	有志	9月18日(火)	誰でも
第6回クリスチャンの集い	〃	10月16日(火)	誰でも
アカトンボ観察会	ワンダースクール	9月17日(月)	ワンダー会員のみ

—秋の生き物観察会のお知らせ—

久しぶりに子供を対象とした生き物とのふれあいイベントを行います。参加費は無料ですのでお友達を誘ってご参加ください。なお、保険にはかけていませんので、各自自己責任でケガなどをしないようにお気をつけください。

日時：9月22日(土) 10:00～12:00

場所：寄居町用土の当会ふれあい農園

申し込み：不要。当日10時に現地に集合してください

持ち物：アミ、入れ物、飲み物など各自必要なもの。

服装：長そで、長ズボン、長靴が無難です

雨天：中止です(不明な場合は新井の携帯：080-8430-9585にお問い合わせください)

見つけやすい生き物：アカトンボ、コオロギ、バッタ、アメリカザリガニ、スジエビ、ドジョウなどかな？

—第3回里親サロンのお知らせ—

日時：9月22日(土) 10:30～12:00

参加対象：自立困難な里子や養子を持つ元里親と養親が対象です。自立に向け知恵出し合い、情報を交換しましょう

—第3回ノアサロンのお知らせ—

今年のノアサロンは年4回の予定ですので、半分が終わってしまいました。第3回はまだ残暑の厳しい季節ですが、早めに計画しました。今回は里親をはじめ児童養護施設、乳児院に勤務する職員が困っていること、行政として改善してもらいたい事などを出し合い、それを埼玉県知事（宛先はこども安全課長）に届けたいと考えています。私はなぜ措置費が埼玉県里親会を経由しなければ支給されないのか疑問に思っています。里親会は入退会自由の市民団体なのに、入会しないと措置費が貰えないというのは不可解です。また、レスパイト制度がありますが、それを利用するには山のような書類が必要で、書類を出すだけで疲れてしまうという声を里親サロンで聞きました。里親登録しても子供が委託されないという不満は何十年も前から解消されません。高齢の里親経験者や未委託里親を短期里親としてもっと活用できないのでしょうか？今回は様々な声をお聞きし、それを県の担当者に届けることにします。県が聞く耳をもつかどうかは関係なく、生の声を届ける努力を私たち当事者はするべきだと思うのです。

参加の申し込みは不要です。関心がありましたらぜひお気軽にお出かけください。

場 所：「いこいの家ノア」（寄居町桜沢 490-7：志村歯科の斜め向かい）

日 時：2018年9月4日（火）：10：30～12：00

問い合わせ：080-8430-9585（新井 裕）

ゴマの生育状況と畑の現状

ノア通信 23号で皆様にプレゼントするためにゴマの種を蒔いたところ、たくさんの芽が出たこととお知らせしました。その後間引きを何度かしたのですが、あまりにも密生しすぎて間引きが不十分なままでした。そのため、あまり背丈が伸びないで成長を追い、花が咲き出し、実が付き始めました。うまく稔るか心配です。

ゴマの隣りにはダイズを蒔いています。これは味噌や豆腐づくりのためです。昨年は収穫直前にアメリカシロヒトリの来襲により、葉っぱが丸坊主にされてしまい、ろくに収穫できませんでした。今年はまだアメリカシロヒトリはいないのですが、そのかわりマメハンミョウという毒虫が大発生しています。この虫は写真のように派手な色彩で猛毒を持つことで知られています。へたに触ると毒を含む体液により皮膚に水ぶくれなどの酷い炎症を引き起こします。この毒はかつて忍者も利用していたとされていて、中国では暗殺時に使われていたとも言われています。こんな恐ろしい毒虫ですので触らず、ほっとしていますが、葉の食害は大したことはなさそうです。そのうちいなく





なることを期待しています。現在虫より手を焼いているのは雑草です。タマネギやジャガイモを収穫した跡地は、雑草を防ぐためカボチャとサツマイモを植えておきました。これらのツルで雑草を覆ってしまおうと目論んだのです。ところが、雑草を甘く見ていました。ツルで雑草を覆うどころか、雑草でカボチャもサツマイモも覆われてしまいました。現在は左の写真のように畑ではなく原っぱと化しています。そろそろ秋冬野菜の植え付け期ですので、何とか草を退治して畑に復元しなければなりません。しかし、連日の酷暑で作業

がはかどらないのが実情です。何とか草を退治し9月初旬までに植え付け作業を完了しなければなりません。草むしりはいつでも大歓迎です。もし都合がつかましたら、手伝ってくださると嬉しいです。

11頃には収穫の喜びを皆さんと一緒に分かち合いたいと願っています。

寄付してくださった方々（平成30年度7月1日～8月15日）

下記の7名の方から寄付をいただきました。本当に有難うございます。

今回から居住地名は省略することにしました。居住地とフルネームがあると、個人が特定され詐欺などの犯罪に巻き込まれる恐れがあるのでは？との会員の意見に対応するためです。イニシャル表示や苗字だけという方法もありますが、やはりフルネームにするのが礼儀だと私は考えます。また、匿名を希望された方には匿名表示にします。

富田光枝様、吉田一夫様、後藤幸枝様、小林京子様、西村健吾様、浅見千恵子様、匿名様

編集後記

予定より1ヶ月早く今年度4回目のノア通信をお届けします。ノアサロンなど行事の予定を早めにお知らせしたほうが良いと考えたためです。

いつもは私一人で会報の書いているのですが、今回は松木さんと南部さんが寄稿してくださいました。酷暑の中にも関わらず、執筆の労をとってくださったお二人に心から感謝します。

ノア通信の原稿はいつでも受け付けています。ぜひふるって寄稿してください。

厳しい残暑が続いていますが、我が家の周辺では夜になると、コオロギなど鳴く虫の音が賑やかになってきました。爽やかな秋もすぐそこに来ているようです。暑さももう少しの辛抱ですね。

今年は台風が多く、大雨の被害が各地で起きています。お互い自然災害や健康に気をつけて、平安のうちに秋を迎えたいものです。次号は9月末か10月はじめに発行する予定です。(Y.A)

ノア通信 24号 (平成30年8月20日発行)

NPO法人ノア 〒369-1205 大里郡寄居町末野1233-2 新井方

TEL&FAX : 048-581-4540、E-mail : tombo2@d1.dion.ne.jp 、携帯 : 080-8430-9585

HP : <http://npo-noah.org/>

年会費 : 正会員 1000 円、賛助会員一口 5000 円

郵便振替口座 : 00110-4-387364 加入者名 : 特定非営利活動法人ノア

銀行から送金の場合は、0一九店、当座、0387364、特定非営利活動法人ノア